

能登幹線鉄塔倒壊と復旧

2005年（平成17）4月1日、石川県羽咋市で発生した大規模な地すべりによって、能登幹線No.32 鉄塔が倒壊、隣接する鉄塔5基（No.29・30・31・33・34）が折損する被害が発生。志賀原子力発電所、七尾大田火力発電所で発電した電力の送電が断たれ、能登方面全域が停電しました。発生が夜間で原因が把握できない状況でしたが、停電時間は最長でも8分間で収まり、出力低下した志賀原子力発電所も原子炉を安全に停止しました。その後、直ちに火力発電所を代替運転して供給力を確保する一方、6月に完成予定だった500kV能越幹線を2か月繰り上げて運用を開始して電力の安定供給を維持しました。

損傷した能登幹線の撤去工事と復旧工事を進めるため、安全なルートを地元住民の理解を得て早期に決定、撤去作業を経て2005年（平成17）11月22日から復旧工事を開始しました。地すべり箇所にあった鉄塔6基を4基に変更して建設することとし、そのうちの2基は1,014mの長径間に対応するため、当時の北陸電力では最大の高さとなる149mの鉄塔を建設しました。冬季の「平成18年豪雪」により平年の3倍以上ある積雪量のなか、約7か月という類をみないスピードで復旧が完了。夏季の電力使用増加前の2006年（平成18）6月13日に運用を再開しました。



能登幹線鉄塔倒壊



復旧後の能登幹線



北陸電力
アーカイブギャラリー

Hokuriku Electric Power Company 自然災害への闘い
ARCHIVE GALLERY